CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Hiroshima University Institutional Repository

ポートフォリオ評価を軸とした教職課程の構造化：教職科目・教育実習科目・教職実践演習の連動性と接続性をどう高めるか

研究代表者　竹下　俊治（自然ｼｽﾃﾑ教育学講座）
研究分担者　草原　和博（社会認識教育学講座）
齊藤　一彦（健康ｽﾎﾟｰﾂ科学講座）
間瀬　茂夫（国語文化教育学講座）
松本　仁志（初等ｶﾘｷｭﾗﾑ開発講座）
森田　愛子（心理学講座）
吉田　成章（教育学講座）
米沢　　崇（学習開発学講座）
研究協力者　佐藤雄一郎（教育学習科学専攻）
宮本　勇一（教育学習科学専攻）
淀澤　真帆（教育学習科学専攻）
松浦明日香（教育学習科学専攻）

Ⅰ　研究の背景と目的

１．背景と目的

「教職課程コアカリキュラム」の設定に伴う教職科目の改訂，および教職免許法の改定に伴う教職課程の改革による影響は，私立大学をはじめとした他大学に比して，専門スタッフと事務体制が整っている広島大学にとっては大きいとは言えない。すなわちこのことは，広島大学大学院教育学研究科には，今時の改革動向に対する教職課程の構造化のモデルを示す役割が期待され，またその期待を呼び込むような発信を研究的にも実践的にもしていく必要があることを意味しているといえる。同時に本研究科内部に目を向ければ，「教職ポートフォリオ」の設定による教職実践演習の改訂は３年を経て，その意義が明確となってきた（H27・28・29 共同研究プロジェクト報告書参照）。しかしながら教職実践演習の改善の取組が，教職科目や教育実習科目，あるいは「広大教員養成スタンダード」における「広島大学でどのような教員を養成するのか」といった教員養成理念までは波及しているとは言い難い。

そこで本研究では，「教職ポートフォリオ」を軸とした教職実践演習の改善とその運用を通して，教職科目（現行の教職に関する科目と教科に関する科目）および教育実習科目（「入門」や事前指導等も含めて）においてポートフォリオ評価を実質的に機能させられるかを実証的に検討することで，教職課程全体の構造を明確にし，その意義と課題を明示化することを目的とした。さらに本目的に向けて研究を遂行するにあたり，大学における教職課程を担当する「教師教育者」の養成のあり方にも着目し，本学の研究・実践シーズである「教職課程担当教員養成プログラム」の取組の検証と発信を連動させて，教職課程の構造化に示唆するものを描き出す試みにも着手することとした。

２．研究計画と取り組みの概要

本研究では，上記の研究目的に対して次のような研究実施計画を立てた。

１）教職課程におけるポートフォリオ評価の実効性の検討

教職課程におけるポートフォリオ評価の実効性を波及させていくため，教職課程全体における「ポートフォリオ評価」の意味を学生に浸透させていく取組を行う。

２）教職に関する意識調査と教職実践演習の評価

教職に関する意識調査の第１学年から第４学年までの継続的な実施，及び教職実践演習の事前・事後調査を実施し，学生の教職観の変遷について検討する。

３）「ポートフォリオ評価」を軸とした教員養成と教師教育者の養成の検討

「ポートフォリオ評価」を軸とした教員養成のあり方と，今後の教員養成に関わる若手研究者としての大学院生の養成，すなわち教師教育者の養成とを連結させながら検討する機会をもつ。

本研究計画に基づいて，上記「１）」については，本学教育学部１年生を対象とした「教育実習入門」において教職ポートフォリオの中核を担う「教育観」の記述と，その「評価材」の選択を学生自身に取り組ませた。また，教育実習にポートフォリオを持参させ，メンター教員に見てもらう取組も継続的に行うこととした。

上記「２）」については，本学の教職課程履修学生を対象としたアンケート調査と，教職実践演習の受講者を対象とした事前・事後調査を実施した。これらの調査は昨年度からの継続であり，成果の一部は梅田ほか（2018）において公開しており，さらに本年度の調査の分析と合わせて公開予定である。また，昨年度の取組の一環として卒業生へのインタビュー調査の成果も学会発表にて公開し（淀澤ほか 2018），論文とした（淀澤ほか 2019）。

上記「３）」については，前年度の取組を発展させ，京都大学の石井英真准教授を招聘し，ポートフォリオ評価を軸とした教員養成と教師教育者の養成に関わる一連のプログラムを企画した。その際，同大学大学院から三名の大学院生にも同行してもらい，同プログラムに参加していただいた。平成 29～30 年度科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽））「総合大学における汎用ポートフォリオ評価システムの開発による教職カリキュラムの改善」（研究代表者：間瀬茂夫）および広島大学教育研究ヴィジョン研究センター（EVRI），広島大学「教職課程担当教員養成プログラム」との協働のもとで企画した一連のプログラムは，以下の通りである。

日時：2019 年 1 月 28 日（月）

9:30-10:00	１．広島大学「教職課程担当教員養成プログラム」による教師教育者養成の取組について
10:30-11:45	２．「教育方法・技術論」教職授業プラクティカムの観察
12:30-13:30	３．広島大学の教員養成におけるポートフォリオ評価の取組について
14:30-15:30	４．教職授業プラクティカムの事後検討会
15:30-16:00	５．「教職教育ポートフォリオ」による教師教育者の養成の取組
16:20-17:50	６．「教職実践演習」の観察（草原教授・竹下教授担当分の教室観察）
18:30-20:00	７．教育ヴィジョン研究センター（EVRI）定例セミナー講演会 No.15 「ポートフォリオ評価を軸にした教員の養成と教師教育者の養成 ―京都大学・石井英真先生と語るこれからの教師教育―」

本報告書では，上記の１～７までの取組の概要をまとめた上で，研究の目的に照らした本研究の成果と課題に言及する。

（竹下俊治*・吉田成章*）

Ⅱ　ポートフォリオ評価を軸とした広島大学の取組の検討

１．広島大学「教職課程担当教員養成プログラム」による教師教育者の養成の取組について

教師教育者養成を目的とした教育学研究科博士課程後期で実施されている「教職課程担当教員養成プログラム（以下，教職 P)」の概要について広島大学大学院教育学研究科・久恒助教より説明がなされた（本取組の詳細については丸山ほか（2019）を参照)。久恒助教からは，①本プログラムが設置された経緯，②３年間の課程の流れ，③教職授業プラクティカム，④教職 P 履修生による共同研究活動について紹介された。とりわけ，本視察スケジュール「２」の教職授業プラクティカム（学内プラクティカム）を観察するにあたって，教職授業プラクティカムについての指導体制や実施手順（事前検討会→教壇実習→事後検討会）の流れが詳細に説明された。

以上を踏まえ，教職 P に関する検討が行われ，石井准教授から，教員と履修生とでシラバスが共同作成しても良いのでは，という提案があった。これに対し久恒助教より，現状では困難であるが，複数の大学の同一科目シラバスの比較や，実習する可能性のある授業の 15 回分の授業計画を立てることを通して, 授業をプランニングする力を育成しているとの返答がなされた。

院生間では，教職 P 履修生の教職プラクティカム以外の授業経験の有無について話題となり，広島大学の院生の場合，教職 P と並行して大学，短期大学，専門学校での非常勤講師として授業実践の経験を積んでいることが紹介され，研究と教職 P と非常勤のバランスについて議論された。

最後に，現在の D２生が中心となって行っている共同研究の成果が報告された（梅田ほか 2018，淀澤ほか 2018，淀澤ほか 2019)。

（吉田成章*・淀澤真帆*）

２.「教育方法・技術論」教職授業プラクティカムの観察

広島大学の教師教育者養成の取り組みに関する研究交流として，教職 P の博士課程後期二年次の「教職授業プラクティカム」の観察が行われた。同プラクティカムは，授業提供教員の指導と連携およびプラクティカム指導教員からの指導という体制のもとで事前検討会，プラクティカム，事後検討会を行う。今回は，教育学研究科深澤教授担当の「教育方法・技術論」のうちの一コマを，博士課程後期院生の早川氏（以下「授業者」）が，授業における規律と指導に関するテーマで授業を行った。

講義は,「授業態度の指導と学習規律の形成」という題であった。パワーポイント（配布資料無）で講義が進められていく形式で，後半から実践記録を二つ用い，補助資料が数枚紹介され，90 分を講義者が話し通す形で行われた。最初に「規律」という概念の重要性を近年の政策動向と照らし合わせて説明され,「規律とは何か」ということが，その概念史とともに整理された。そこでは「規律」と「きまり」の違いが主に強調され,「管理」や「指

導」といった類似概念との関係性にも触れられながら講義が進んでいった。その後，講義は実践事例から規律指導の具体的な方法や特質を考える段に入った。授業者がテキストを読み通し，読み終わった後にポイントをいくつか指摘した。読んでいる途中には，授業者から同テキストから読み取れる指導のポイントを抜き出すよう課題指示がなされた。事例検討の後に，講義は規律指導に係る今日的問題について，授業のスタンダード化の問題，インクルーシブ授業からみた規律の問題，とりわけゼロトレランスに関する問題が挙げられ，講義者自身の見解が述べられた。ゼロトレランスについての資料を読み，最後に「ゼロトレランスやスタンダード化の中で学習規律の徹底とよく言われるが，なにをすることで徹底と言えるのか」という問いかけで講義は終了し，コメント記入の時間へと移った。

同プラクティカムの教授内容や教授方法に関するコメントとディスカッションは，事後検討会で行われた。

（吉田成章*・宮本勇一*）

３．広島大学の教員養成におけるポートフォリオ評価の取組

間瀬教授によるポートフォリオ評価を中心とした本学の教員養成における取組についての説明がなされた。

間瀬教授からは，本学の教員養成が行ってきたこれまでの取組として，①「広大教員養成スタンダード」の設定，②教員免許ポートフォリオ・システムの構築と運用，③「教職実践演習」の構想・実施，④抽出ポートフォリオによる教員免許ポートフォリオの実質化，⑤教職課程におけるポートフォリオ評価と「教職実践演習」の検証，⑥教育実習時における抽出ポートフォリオの試み（国語）の６つの取組に関する説明がなされた。また，広島大学の教員養成におけるポートフォリオ評価の取組に関わる今後の課題として，システムの弾力化や可変化を目指したｅポートフォリオの見直し，「抽出ポートフォリオ」の活用や共有，多様な教師教育者とのコミュニケーションの機会提供，「教職実践演習」の改善として学校現場・フィールドワークの導入や教科の融合等についても言及された。

以上の説明について，石井准教授からは，大学内と大学外で生じるポートフォリオ・システムの問題性について言及された。

教職ポートフォリオ・システムがどの大学においても有効である一方，作成された教職ポートフォリオの活用や評価のあり方についてはさらなる検討が必要である。具体的には，大学内の共有に留まらず，作成した教職ポートフォリオの教育委員会への開示・公開，教員採用試験での利用，教職に就いた後の継続的な学びの蓄積・ポートフォリオの改訂，自身の実態を書き記すことによる現職教員のスキル向上，現職教員の評価材としての多方面での活用などが考えられる。石井准教授からは，教育実践記録との違いや教職ポートフォリオ評価の取組が実践研究論文として位置づけられるかどうかについてコメント・質問があった。間瀬教授からは，広島大学だけでなく多様な大学で使用できる汎用的なポートフォリオの構想が今後望ましいことに加え，教職ポートフォリオ・システムの形骸化が喫緊の問題であり，ポートフォリオが評価の対象になる機会が少なく，大学教員の評価のみに限定されているという状況に触れ，教員採用試験での利用やポートフォリオを誰が評価するかという評価に関わる具体的な検討を今後も継続的に行っていくことが示された。

（吉田成章*・松浦明日香*・間瀬茂夫）

４．教職授業プラクティカムの事後検討会

「２」の教職授業プラクティカムに関する事後検討会が行われた（図１）。授業者からの振り返りとして，今回は一方的に説明することに徹するような講義を意図しており，事前検討会で提案されたグループ活動を入れず，ある程度充実した授業となったとのことだった。

その後の質疑応答では，授業者の意図の確認として,「資料を配布しなかった理由」「与えた課題に対して考える時間を与えなかった理由」などが質問された。

図１：プラクティカム事後検討会の様子.

授業において，用意された実践記録を全文読んでいたことについて疑問が示された。授業者の意図は，規律の授業における重要性とその概念・問題などについて要点を「講義」することであった。配布プリントも講義者の意図が反映されており，要点を抽出して話すべきところを,実際には学生に考えさせるという開いた態度で全てを読んでいたことから，講義の意図と，学生に考えさせるという行為のギャップについて指摘があった。

プラクティカム指導教員の山田教授からは，上記の点に関連して，講義という形式と演習という形式の比較から，講義する際に見落とされがちな視点が指摘された。すなわち，演習では学生が意見をつないで話していくことが重要視され，学生の理解度を点検・見守る必要があることは自明であるが，実は講義こそが，知識の垂れ流しではなく，理解に到達させるために学生の理解度をより綿密に感じ取りながら授業を進めることが重要であると指摘された。今回の講義では，学生側の静かながらの理解度の反応を読み取ることのない一方向的な授業のあり方が問われていた。

石井准教授からは，講義をするときの学生の呼吸の理解に関して,「身体とまなざし」という言葉も引き合いに出し，学生に「伝える」講義という行為における,「説明する」ことと「語り掛ける」ことの違いについて指摘された。授業者が資料を読んでいる際，資料にマークしたりメモを取ったりした学生がどのくらいいたのかなどを授業者が意識していたか，パワーポイントによる情報の「説明的」な伝達が，相手意識を醸し出さないことについても言及され，講義では「説明の文法」ではなく「語りの文法」が重要であり，学会発表のようなパワーポイントによる講義形態がミスマッチではないか,という指摘であった。

授業で提示された課題ついて，久井准教授より，最後の問い「規律指導を徹底するといわれるが，何をすることで徹底したことになるのか」について，学生が考えるべき問いとしての意図は何であったのか，が質問された。京都大学大学院生からは，規律をめぐる問題で生まれる「価値葛藤」を議論の軸に据えることで，学生が考えるきっかけを与えられると提案された。これを受けて石井准教授からは，本授業のねらいは，規律という考えの「リフレーミング」，すなわち，学生の「規律」についての素朴なイメージをときほぐし，きまりや管理との対比の中で，子どもの学びを成立させる重要な契機としての規律を理解

させたかったと解釈されること，そのための方略としては，違う問いが違う流れの中で出される必要があったこと，具体的には，ゼロトレランスがもたらす価値葛藤に学生を着目させ，規律のあり方を捉え直させることが必要だ，との提言があった。

授業で用いた実践記録の位置づけについて，授業者は規律指導の「典型」として参照したと述べた。これに対し，この「典型」と講義前半で述べた規律の指導方法との関連性がないことが指摘された。実践記録では，挑発的な働きかけにより動いた子どもの学習行動を規律へと高めていくものであったのに対し，規律の指導方法の「典型」では，「ほめる」という行為であった。総じて，講義者の中で蓄積されてきた規律を巡る多くの重要なポイントや関連事項の広がりのマップが未整理だったのではないかという指摘であった。

意見交換は総じて，一方通行の講義という試みによって生じた諸論点（諸問題・諸課題）をめぐるものであった。学生が置き去りになったタイミングや，逆に学生が能動的になったトピックなどが指摘され，教えたいことと学生の興味関心の間で，話し手は一人であっても，その中でインテラクティブな教授―学習行為を成立させる手立てが寄せられた。

このように，事後検討会は授業者の技術的な良し悪し以上に，授業者が引き起こした事象が大学講義・教職課程の講義上どのような意味を持ち得るのか，という論点へと昇華させることが試みられている。今回は，「説明の文法」から「語りの文法」へ，また，資料活用の類型－典型なのか問題提起なのかなど，主要発問の精密化とその文脈化の方途などが論点としてあがり，個々の経験に即しながら活発に意見交換が行われた。

（吉田成章*・宮本勇一*）

５．「教職教育ポートフォリオ」による教師教育者の養成の取組

教職Ｐ履修３年次生の佐藤氏と藤村氏の二人から，３年次生の最終段階に行う「教職教育ポートフォリオ」作成が紹介された。教職Ｐ３年次においては，広島大学外での教職プラクティカムが実施され，最後に「教職教育ポートフォリオ」をまとめて３年間の学習の成果が集約される。「教職教育ポートフォリオ」を検討する授業は，１年次生と２年次生もオブザーバーとして参加可能であり，本プログラムの見通しを持つことができる。

藤村・佐藤の両氏は，現在作成中の「教職教育ポートフォリオ」に加え，過去の履修生のポートフォリオの完成体と完成までの改訂作業の履歴を示しながら，現在どのように振り返りを行っているのかについて，また授業理念の検討過程についても紹介した。例えば，作成中のポートフォリオで教壇実習の「失敗」に焦点を当てて自己評価を行ったものについて，自身の感覚としては「授業は『失敗』に終わった」と記述したものの，それに対し指導教員から授業での「失敗」について問い直され，授業者にとって「失敗」と感じることと受講学生の受け取り方は異なり，自分自身の授業の「失敗」の相対化について検討しているところであると報告した。また，受講生同士で授業について話し合うことで，教師教育者となる者としての情報共有が有意義であると述べた。

このように，ポートフォリオの作成においては担当教員による質問や受講者の議論によって，教師教育者としての授業理念が確立していく。吉田准教授より，ポートフォリオそのものよりも作成過程の重要性について述べられ，学部生が作成するポートフォリオとのつながりが提示され，まとめとなった。

（吉田成章*・淀澤真帆*）

６.「教職実践演習」の観察

広島大学後期に開講されている中・高等学校の教員免許取得予定学生を対象とした「教職実践演習」の第 15 回目を観察した。今回観察したのは，草原教授の社会科と竹下教授の理科である。

草原教授の教室では，まず学生たちは１グループ６人の計５グループに分かれて,「５年後の私」というテーマで描いてきたイラストを持ち寄り，それぞれのグループ内で意見交流を行った。その後，グループ単位でイラストの展示計画を立て,「鏡山ポートフォリオ展覧会」なる鑑賞会を行った。担当教員である草原教授からは，展示計画を立てる際に,「学芸員になったつもりで，作品をグループ分けしたり，キャプションをつけたりする」よう指示があった。それぞれのグループが模造紙に６枚のイラストをいかに貼り付けるか創意工夫し，色マーカーで強調点を出したり付箋で解説を加えたりしながら作品を完成させていった。出来あがった作品は壁に貼り付けられ専用ブースが設けられた。学生たちは各グループの作品を鑑賞し，自分の意見を付箋に書いて自分が共感する作品に貼り付けていった。最後の 30 分間は,「教師になるとはどういうことか？」というテーマで意見交換が行われた。この時にも，草原教授から，「『なりたい自分』像は，みな違う？」「似たところは？」「将来にどんな困難が予測される？」「私の戦略は？」といった学生間の意見交換を豊かにするための視点が提示された（図２）。

図２：草原教授による「教職実践演習」の様子.

竹下教授の教室では，竹下教授と８人の学生が理科の実験机のまわりにロの字型で着席し，学生の一人が教師になったとき，どのようなことに気をつけたいか，または，自分が現在持っている教育観について発表し，竹下教授も交えて他の学生も含めた全員で質疑応答を行い，発表した学生に全員から付箋に書いたコメントが渡されていた。課題提示の際には，発表者は数人だけの予定であったが，最終的には全員が発表する形となった。学生たちの多くは教育実習中に体験したことを具体的に挙げながら，教師になったときに大切にしたいことを語っており，学生にとって教育実習での経験は，教師生活をより現実的なものとして捉える機会となっていることが伝わってきた。学生たちは，こういう教師になりたい, 教師になったらこういうことをしたいといった理想像を語る一方で, 課題や不安, 迷いについても積極的に発言しており，卒業も迫り，近く教職に就く学生たちが今抱えているポジティブな面，ネガティブな面の両方が共有できる場となっていた。また，学生の発表では，教育実習での体験の次に自身の教育経験が例に出されることも多く，一人一人の切実とした語りを周りの学生たちは真剣に聞き入っている様子であった。

（吉田成章*・松浦明日香*・竹下俊治・草原和博）

７．教育ヴィジョン研究センター（EVRI）定例セミナー講演会 No.15

EVRI 定例セミナー「ポートフォリオ評価を軸にした教員の養成と教師教育者の養成」が開催された。まず吉田准教授から，当日の石井准教授による視察の目的と内容が報告された。その後，間瀬教授より本セミナーの設定趣旨が説明されるとともに，改めて「３．広島大学の教員養成におけるポートフォリオ評価の取組」が紹介された。

これらを受け，石井准教授から一日の視察をふまえた広島大学の取り組みについてのコメントがなされた（図３）。広島大学の「ポートフォリオ評価」や「教職実践演習」にもとづく教員養成の大きな特徴であり意義深い点は,「観の自己形成」をゴールに設定していることであると指摘された。「広大教員養成スタンダード」における「規準」を達成していきながらも，それらを統合する価値や目的として「観の自己形成」があることで，スタンプラリー的な教職課程を超えた「実力」の形成に向けて，カリキュラムの体系化が図られている。一方で，スタンプラリー的な教職課程を超えたカリキュラムのさらなる体系化のためには，教職課程のヴィジョンがどれほど明確化しているか,「広大教員養成スタンダード」を構成する「規準」がなぜその八つであり，どのような重みづけがされているのかが検討されてよいのではないかと問題提起がなされた。すなわち，こうした「観の自己形成」に果たす「ポートフォリオ」の役割は，学びの経験を物語的に再構成することにある。それは単に教員養成を目的とした枠組みの中だけではなく，日本の教師たちの実践記録を書く文化の復興にもつながるものである。それゆえ，例えば，教職のキャリアラダーのシステム化において評価資料として位置づけるなど，教師教育のためにも積極的に活用する方途を検討することが必要である。翻ってこのことは，広島大学はどのような教員を養成するのか，という中心的論点に触れることにもなる。

図３：コメントされる石井准教授（写真右手）.

さらに石井准教授から,「教職課程担当教員養成プログラム」による教師教育者養成の意義は，教員養成と同様に「観の自己形成」をゴールに設定することで，教員養成（教師教育）を担う大学教員へのレディネスが形成されている点にあると指摘された。すなわち，授業力の育成による「研究者から大学教員へ」の移行，実践しながらそれを研究成果としてまとめていく経験の積み重ね，教育に関する抱負の熟考が，教師教育を担う「観の自己形成」として統合されるよう設計されている。一方で,「教職課程担当者」と「教師教育者」の違いや教師教育者にこそ必要なものとは何かは，検討されてよい。教師教育者に必要なのは，教育学研究の知見を「説明すべき概念」としてではなく「現実を読み解く眼鏡」として捉えること，また自分の教育学研究の実践性（レリバンスと現場感覚）を問い直すことで授業の構想力とタクトを鍛えることである。そうすることで，理論と実践を往還する教師教育者（実践的研究者）の育成につながるのではないか，と提起された。

以上のような広島大学の教員養成および教師教育者養成の取り組みの意義，課題，そこから導かれる教員の養成と教師教育者の養成に向けた論点をふまえて，フロアとの議論が行われた。教員養成においていかに構想力とタクトを育成することができるか，何をこそ教職志望者につたえなければならないか，教員研修でどのようにポートフォリオを活用できるか，広島大学のポートフォリオ評価における「規準」と評価材の不一致といった点が話題となった。広島大学のポートフォリオ評価については，「教職実践演習」を経験した学生と同科目を担当している教員との議論やポートフォリオ評価を運用する上での問題点の共有がなされた。また，ポートフォリオが持つ自己評価機能については，石井准教授は京都大学の「履修カルテ」（自己評価ルーブリック）を提示しながら，「観の自己形成」のために，経験のまとまりを自己評価していくこと，構想力やタクトを“見える”ようにしていくこと，理論をベースに授業を語る言葉を豊かにしていくことが重要であるとした。

最後に草原教授（EVRI センター長）より，今後取り組むべき課題が大きく三点提起された。第一に，自分なりの教育観を確立し実践記録を書き続けることができる教師，またポートフォリオを見て語ることができる教師教育者をいかに育てることができるのか。第二に，自分が身につけてきた知識や能力をいかに自覚的に自分の実践に循環させ，他の場面でも置き換え，時に問い直すことができるか，またそれらをどのように次の人へとつなげることができるか。第三に，専門者間の共通項としてどのような目指す教師像をつくることができるか，いかに養成・採用・研修が手を取り合ってその像を形成しシステム化していくか。この三点の提起を総括とし，本セミナーは閉じられた。

（吉田成章*・佐藤雄一郎*・草原和博・間瀬茂夫・森田愛子）

Ⅲ　研究の成果と課題

本研究の成果と課題として，次の二点を指摘することができる。

第一に，「観の自己形成」というキーワードをもとに教職課程の構造化をはかることの意義と課題である。教職実践演習にて作成する「教職ポートフォリオ」および博士課程後期院生が作成する「教職教育ポートフォリオ」のいずれにおいても，自身の「教育観（Teaching Philosophy）」の明示とそのエビデンスとしての「評価材」を蓄積・修正することで，ポートフォリオ評価を機能させることが本研究科の教員養成および教師教育者の養成の軸となっている。この取組の意義は，石井准教授から明確に指摘された通り，「観の自己形成」にあるといってよい。一方で，この「観の自己形成」を促すための教職課程のより強調点のある構造化に課題があるのも事実である。「教育観」の省察と明示は教職実践演習での学修のみにとどめるのではなく，教職課程の学修が進んでいく過程において，とりわけその節目となる教育実習等においてより明確に位置づけられるべきである。本研究プロジェクトでは，試行的に教育実習時にポートフォリオをメンター教員にも見てもらう取組にも着手しているが，その発展的・継続的な取組がより重要な課題となっている。したがって，「観の自己形成」という軸をポートフォリオ評価という教育機能と連動させながら，教職科目・教育実習・教職実践演習においてより実践的に機能させていく学修を構想・構築していくことが肝要であろう。

第二に，教員養成と教師教育，さらに教師教育者の養成に「ポートフォリオ評価」という一続きの軸を通すことによる研究的・実践的な意義である。教職に関する意識調査の実

施に係る具体的な分析結果については本稿では詳述できなかったが，卒業生のインタビュー調査を含めて，その研究調査のプラットフォームを形成することができた。教員養成段階にある学生にとって,「教職」あるいは「教育観」がどのように位置づけられているのか，その変容の契機や過程はどこにあるのか，教職に就いてから教職課程はどのように意味づけられるのか，継続的な調査研究に取り組むことで，これらの実態とその関係を明示していく可能性が示唆されている。さらにEVRIセミナーでは，現職教員を対象にしたポートフォリオ評価の意義と課題についても議論された。教員の養成・採用・研修の一体化が求められる今日の改革状況に鑑みれば，本取組で着手している「教職ポートフォリオ」をより長いスパンで捉えることも重要であろう。それは場合によっては，教職課程を志す高校段階から，学校の管理職に就くまでの20年あるいは30年というスパンでの実践的構想として描きうるものであるかもしれない。また，教職Pを履修する大学院生だけではなく，教職実践演習に関わるTAとしての大学院生にとっても，自身の「教師教育観」を明確にしながら教師教育者としての養成を振り返るツールとして「ポートフォリオ評価」は機能しうるものでもある。将来の教師教育者を志す大学院生を多く抱える研究大学としての本学教育学研究科の特色と強みをより明確に示すためにも,「ポートフォリオ評価」を軸とした教員養成・教師教育・教師教育者の養成の一体的構想には，大きな研究・実践の可能性が秘められているのではないだろうか。この点から見ても，教職課程への大学院生への関与や教職課程での学修と現職教員にとっての研修とを接続する可能性を拡大するための教職課程の構造化がより強く求められることになる。

今後，具体的に記すことができなかった研究の進捗とその成果をまとめるとともに，ここで示された研究の成果と課題を具体的な教職課程の運営および教師教育研究への学的貢献という形で継続的な取り組みの課題として検討していきたい。

（竹下俊治*・吉田成章*・草原和博・齊藤一彦・間瀬茂夫・松本仁志・森田愛子・米沢　崇）

引用文献

梅田崇広・井上快・周心慧・早川知宏・深見奨平・宮本勇一・淀澤真帆・李憶南（2018），「教職実践演習受講生を対象とした教職課程に関する意識調査」，第24回大学教育研究フォーラム個人研究口頭発表（2018年3月22日　部会27）.

丸山恭司・尾川満宏・森下真実編（2019），「教員養成を担う―『先生の先生になる』ための学びとキャリア―」，溪水社.

淀澤真帆・周心慧・宮本勇一・李憶南・梅田崇広・早川知宏・深見奨平（2018），「新卒教員は教職経験をいかに語るのか？」，中国四国教育学会第70回大会口頭発表（2018年11月17日A-9「教師教育I」部会）.

淀澤真帆・周心慧・宮本勇一・李憶南・梅田崇広・早川知宏・深見奨（2019），「新卒教員は教職経験をいかに語るのか？」，中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第64巻，印刷中.